

学習を再定義する：歴史と協働の中の学びへ

企画：青山征彦（駿河台大学）・香川秀太（青山学院大学）

話題提供 川床靖子（大東文化大学）

有元典文（横浜国立大学）

土倉英志（浜松学院大学）

指定討論 青山征彦（駿河台大学）

高木光太郎（青山学院大学）

企画趣旨

このワークショップでは、心理学や認知科学における最重要概念の一つである学習にスポットをあてる。人間の学習は、認知科学においても、長らく個体主義的に捉えられてきた。しかし、近年は、学習をより社会的な実践として捉えるような研究も少なくない。例えば、ホルツマン,Lは、従来の学習発達論が、認知的な変化を強調して、情動を排除してきた点を批判しながら、社会的、集会的なものとしての「最近接発達領域」概念のさらなる拡張を試みている。そこで、本ワークショップでは、先鋭的な学習研究をされている3氏に話題提供をお願いし、社会的な実践としての学習について考えてみたい。

川床氏は、歴史のある織物である「縞もめん」をめぐるネットワークの研究で、学習の持つ歴史性へとアプローチしている。

有元氏は、みんなだとできること＝「集会的達成」という観点を提示し、学習をそもそも他者との協働によってなされるものと捉え直している。

土倉氏は、サイエンスカフェにおいて学生が「利用者」「協力者」とポジションニングを変えていくことの意義と可能性に着目する。

これらの発表をもとに、従来の学習概念が見落としてきたものは何なのか、認知科学は今後、どのような視座に立つべきかを考える場にしたい。

話題提供1：時をネットワークする

川床 靖子（大東文化大学名誉教授）

「松阪縞もめん」は三重県松阪市に伝わる木綿織物である。その発祥の歴史は古く、今から400年以上前に溯るが、19世紀の半ばから20世紀の半ばまでのおよそ100年間は歴史の中に埋もれていた。しかし、この35、6年余りの間に、松阪縞木綿をめぐる幾つかの新しい活動が地元の機関や市民グループの間から生まれている。そうした活動の牽引役を果たしたのが松阪歴史民俗資料館である。本論で詳しく述べるが、この資料館が行った活動は、過去をネットワークすることを通して現在を再ネットワークすることであったと言えるだろう。

本発表では、松阪歴史民俗資料館の主導のもと、「松阪縞もめん」をめぐる人、もの、装置、そして、過去、現在がどのように配置されて一つの歴史（一つの物語）が構成されたのか、また、そうした過去現在にわたる人、もの、装置のコンフ

イギュレーション（配置・編成のあり方）がどのようにして「松阪縞もめん」の新しい歴史を創出しようとしているのかということをも科学技術論的アプローチによって検討する。さらに、「松阪縞もめん」をめぐる人、もの、装置の配置・編成のあり方の具体的な分析を通して、活動に参加する人々の‘エージェント’の構成・変化に見る学習の成果 (outcome)、および、フィールド研究において「学習」というものをどのようにとらえることが可能かということについて考察する。

話題提供2：学習の再フレーム化

有元典文（横浜国立大学教育人間科学部）

「学習」というのは出来なかったことが出来るようになる行動の変化、として定義される。この行動の変化は、観察によって作られる社会的な事象でもある。なぜならそれは過去と比較した「行動の変容の認識」(有元, 2001)によってしか明らかにならないからだ。過去のどの地点とどの未来を比較するか、どう記録しどう表現するかは、観察者によって任意に設定される。つまり学習とは徹頭徹尾、観察によって創られた変化だと言える。学習が観察次第ならば、観察方法や観察の参照枠自体も再設定可能である。その方が有益だと思われるなら、個人の・垂直な・成長的变化を前提にしなくてもよい。Vygotskyは発達を個人内ではなく個人間の事象として観る力動的な視点を提案した。人間と人間の社会は「不揃いの木を組む」(小川, 2012)ように、互いに互いを補い合っている。ならば、みんなの・水平的なつながりによって・独力ではできなかった未来の自分がふるまえることを、学習と呼ぶことには意義がある。学校教育はつい子供を独りにし、未来の独力に備えて

独力を鍛える。しかし未来の集合的活動に備えて、いま・ここでできることを、皆で支える行き方もある。そのことで出来なかったことが出来るようになったら、それも「学習」だ。いまを皆で支えることを学習ととらえる事について、検討したい。

話題提供3：サイエンスカフェの企画・運営を通じて達成される学び—ポジショニングとネットワークの視点から

土倉英志（浜松学院大学）

筆者のゼミではサイエンスカフェの企画・運営を行なっている。イベントに向けて学生が取り組むことは多岐にわたる。イベントに適したカフェ探しと交渉、話題提供のプレゼン作成やワークの準備、ファシリテーションの練習、広報、等々。それでは、イベントの企画・運営を通じて学生はどのようなことを学んでいるのだろうか。

彼らのポジショナリティに注目してその一端をみてみよう。大学で「教わる」立場にある彼らは、イベントの話題提供では「教える」立場をとる。ふだんはカフェの「利用者」である彼らは、イベントではカフェの「協力者」となる。ライブやワークショップ等に参加するときにはお金を支払う「消費者」である彼らが、お金を受け取る「生産者・サービス提供者」となる。イベントの準備・運営のなかで、彼らのポジションは入れ替わったり、分裂したり、入れ子になったりと、うつろいゆく。

サイエンスカフェは、多様な人びとをひとつの活動に結びあわせることではじめて成り立つ。つまり彼らの活動はネットワークとみなすことができる。本発表では、万華鏡のようにくるくると立ち位置や視点を変えていくネットワークとしての彼らの学びを検討したい。